

てあて  
て手当をしましたが、紀美はわるくなるばかりで、ついにどっどこについたまま、死をまつありさまになってしまいました。

冬がすぎ、春がめぐってきました。やがて青葉あおばの季節きせつとなり、油あぶらぜみのなくま夏なつになりました。

そのある日の夕方ゆうがた、紀美は、長者ちやうじゃ夫婦ふうふをまくらもとによんで、「わたしが死ぬし前に、どうか渡瀬わたらせにある大きな池を見せてください。」とお願いしました。



ひとりむすめのたつてのねがいを聞いて、長者夫婦は、すぐにかごをたのみ、おおぜいのおともをつけて、むすめを、その池にむかわせました。

一行は、富田部落ふたを通り、つたがおいしげる山道をかきわけて、朝日獄たけのふもとの大きな池に着いたときには、もう日はくれかけていました。

池は、うっそうとしげったうす暗い森のかげをうつして、ぶきみに静しずまりかえていました。

紀美は、おともの人びとのどめるのもきかず、弱ったからだで、ひょろひょろと池の岸きしに近より、池の底そこを見通さんばかりに、水面すいめんをじっと見つめては、またもの思いにしずむのでした。

しばらく、岸きしにたたずんでいた紀美は、なにを思ったのか、いきなり身をおどらせて、ざぶんと大池の中に飛びこんでしまいました。

はもんは、うす暗い森のかげをくずして、池いっぱいになり、しばらくの間、水の中から異様いようなうなりごえが聞こえました。おとも者たちもあっけにとられて、どうしようもなく、立ちすくむばかりでした。

しばらくすると、ふたたび、水面にはもんがおこり、そこに目もくらむばかりの黄金おうごんの鮫さめがうかび上がりました。